

7月上旬にY小学校に行ってきた。国語の授業を参観して指導助言をするためである。この小学校では、今年度からリーディングスキルに取り組んでいる。野田中学校や野田小学校とは“同志”のような関係である。取り組み始めた1年目の苦労はよくわかる。本校では、五里霧中、暗中摸索の状態だった。そこまでではないかもしれないが、悩みは尽きないはずである。

授業は5年生、教材は「世界でいちばんやかましい音」だった。授業者は30代後半の方だった。この年代は、教員人生の中でも大事な時期である。研究授業をどんどん行い、たくさんの授業を見た方がよい。多くのことを吸収すべき時期である。

教室に入ると、子どもの多さに多少驚かされた。32名だった。今では30人を超えると多く感じる。雰囲気が良い。先生と子どもとの関係もよい。教室に入ったときの、あの空気感は何ともしがたいものである。参観する先生方の取り組む姿勢もよい。

授業が始まった。ワクワクするような導入ではないが、子どもたちは反応よく、先生の働きかけに応じていく。めあてはわるくないのだが、全員での復唱に加えて、何をするのかの確認があると、全員の子どもたちにとってよかった。この時点で、すでにわかっている子どもが一定数いるものである。一人も取り残さないためには必要である。

今日の学習に関わる部分を音読した。立って全員で声を出して読んだ。全員に音読の時間を確保することが大切である。だが、一度しか読まなかった。これでは足りない。もっともっと音読をするべきである。時間がないと思われるかもしれないが、わずか数分である。音読の重要性に目を向けるべきである。

教科書に線を引かせた。どの子どもも見ると熱心に取り組んでいるように見えるが、実はどこに線を引いたらいいのか困っている子どももいる。先生は、その子のところにおいてアドバイスをしていた。大事なことである。

めあてに対する自分の考えをノートに書く時間となった。ワークシートを使わず、ノートというのがよい。書かせるのも正解である。しかし、時間が短すぎる。3分だった。メインの活動に3分では足りない。もっとじっくり考えさせたい。たくさん書かせたい。これでは、困っている子どもへのアドバイスもできない。そのためには、先生がしゃべる量を減らすことである。やるべきことを絞ることである。これが、教材研究であり、容易なことではない。

その後、近くの人とノートを交換しての交流となった。これがどうなのかと思う。この光景を他の学校でも見ることがある。疑問である。指導案には話し合うとある。だが、話し合っていない。たぶん、他の人が書いたことを参考にさせたいという意図で行ったのだと思う。確かに話していることを聞くよりも、書いてあることを読んだ方が頭には入るだろう。しかし、多少拙くても、ノートを見ながらでも、自分の考えを相手に伝えた方がよいように思う。

授業は、まとめ、そして多少オーバーはしたが、振り返りまでいった。なかなかできないことである。45分間で、多くの子どもに発表させることができた。だが、その一方で、この時間に何を学んだのかが不明確な子どもも少なからずいた。今後の課題である。

この小学校は、校長先生のリーダーシップのもと、みんなで取り組む態勢ができている。だが、リーディングスキルは一筋縄ではいかない。校長先生の他に、先を走るフロントランナーが必要である。今回の授業者ならば、その役目を担ってくれそうである。話す内容から、よく勉強していることがわかった。授業について、よく考えていることもわかった。

一番よかったのは、「読めば読むほどこれでいいのか」「板書計画を考えていて不思議な気持ちになった」「板書計画を考えるたびにわからなくなる」という発言である。本人としては不本意であろうが、私としては頼もしい。前に進んでいる証拠である。がんばれ、フロントランナー。

協議会では、教頭先生から核心を突くようないい質問があった。心の中で拍手をしていた。学校に入り、駐車場に向かうと、ちゃんと駐車スペースが確保されていた。にもかかわらず私の前の車が、そこに置いてしまった。よくあることである。私には教頭先生の心遣いが十分に伝わっており、問題はない。

Y小学校の子どもたちが、これからどのようにしていくのか楽しみである。その陰には、先生方の授業改善に対する日々の取組があるはずである。ついつい、6年生での「海の命」の授業を見てみたいと言ってしまった。そう思わせる授業者と子どもたち、そして先生方であった。